未来を見据える

いわき市立好間中学校　田仲楓子

この本の題名をみたとき、私はバッグやオシャレが好きな女性が会社を設立し夢をかなえた話なのかなと想像した。しかし、本を読み進めていくと一人の女性が「人の命を救う仕事がしたい」という思いから奮闘する、私の想像とは違う夢をかなえていく話だった。

この本は社会の抱えている問題を解決するビジネスを立ち上げる「社会起業家」である仲本千津さんの話だ。千津さんがアフリカでバッグ工房を立ち上げるまでの道のりは決して楽なものではなかった。それに、千津さんは最初から社会起業家になろうと思っていたわけでもなかった。多くの困難にあたり悩んで夢をかなえる姿が私を勇気づけてくれる。

まず、私はどうして人の命を救いたいのにバッグ工房を立ち上げるのだろうという疑問をもった。私が考えられるのは、食べ物がない子供達に食料を届けるために募金を呼びかけたり、いらない洋服や靴、カバンなどを途上国へ送ったりする取り組みをしたりするこ

とだ。初めは千津さんの考えが分からなかったけれど、少しずつ意味が分かってきた。千津さんはウガンダの村々へ行ったとき、男性より女性の力で社会が成り立っていると気づいた。でも、ウガンダではシングルマザーが多くその人達は生活が苦しいことが分かっていた。だからこそ、千津さんは女性と一緒に仕事をすることでその女性達が自立できるように サポートしたかったのではないかと思った。女性がきちんと収入を得ることで、その人の子供も学校へ行けて安定した職につける。千津さんは、女性の自立を通して目の前の命だけでなくその周りの人達の命まで考えてこのビジネスを立ち上げたのだと思う。

私は千津さんから学んだことがある。それは、人助けだと思ってバッグを買ってもらうことはしたくない、それよりも「好きだから買いたい」と感じる商品をつくりたいという思いだ。私は初め、「どうして人助けで買ってもらうのはダメなんだろう。バッグが売れ

れば会社の利益にもなるのに」と考えていた。でも千津さんは違った。一回買ってもらってサステナブルなビジネス終わりではなく、「サステナブルなビジネス」にしたかったのだ。千津さんの考えがなんとなく分かってくると、千津さんはここでも未来を見透えてビジネスをしているんだ、すごいなと思った。

千津さんの考え方を知っていくうち、千津さんが私のあこがれになっていった。私は今、千津さんの学生時代と同じく学級委員をやっている。千津さんは自分の意見を押し通そうとせず、みんなの意見を尊重する人だったそうだ。私もそんな人がリーダーになってほしいし、その方がまとまると思う。私もそういう人になりたいなと思うが、実際は難しい。例えば仲の良い友達が大声で話をしていると き、どうしても注意することをためらう。勇気を出して話かけたとしても、自分も交ざって、結局他の人に「うるさいよ」と言われてしまったことがある。私が注意した方がクラ

スのためにもいいのに、楽しい方に流されてしまう自分もいるのだ。千津さんだったら、こんなとき、どうやってクラスをまとめるのだろう。

また、千津さんは人前で堂々と自らの夢について宣言したそうだ。千津さんの親友は、「やりたいことを素直に口に出すから、人から応援されるんだ」と話していた。私は人前で夢を語るのは恥ずかしいと思ってしまう。しかし、千津さんみたいに人から応援される人間になることはできるのではないか、と考えた。私はよく、部活動の先生から「応援する人は応援される人になる」と言われる。今までは「そうかな？」「本当かな？」と疑う気持ちがあったが、応援される人間になりたいから、まずは周りの人を応援できる人になろうと思う。

なぜなら、応援される人間というのは、人から愛されている人間だとも思うからだ。千津さんは、みんなから愛されていたから学級

委員を任されたり、自分のやりたいことをやるために、勤めていた銀行を退職することになっても、後押ししてくれる上司がいたり、仕事の良きパートナーがみつかったりしたんだと思う。私も、みんなから応援される、愛される人になれるようにこれから行動していきたい。

この本の冒頭に、「タタタタ、タタタタ、タタタタ！」というミシンの音が書かれている一文がある。そして、最後にも同じような一文がある。私にはこの同じようなミシンの音の最後の音が、冒頭の音と比べて、楽しそうで軽やかな音で、千津さんとアフリカの仲間達の笑い声が交じっているようにも聞こえた。これは、千津さんの「その人らしく輝ける女性を増やしたい」という願いが、私に伝わったからなのではないだろうか。自分がやりたいことに正直で、ずっと前をみて進んできた千津さん。私も千津さんのような未来を見透えられる強い女性になりたい。